

るので、こうした経験を十分に与えられない状態も「阻害要因」として考えている。インクルいわての活動目的は、こうした阻害要因を直接的もしくは間接的に取り除くことである。

## **5. インクル子ども食堂は、誰に、何を提供しているか**

インクルいわては、子ども食堂事業の目的を「ひとり親やその子どもが地域で生きていく仕組みづくり」としている。その目的は、2つに分けられる。

- ・ひとり親家族の子どもと親が社会の一員として尊厳のある生活・人生を生きるための力をつけること
- ・共に支え合い、誰一人取り残されない地域社会を創ること

前者の対象者は「ひとり親とその子ども」であり、この事業の直接的かつ明示的な受益者である。一方、後者の対象となるのは、地域のステークホルダーである「行政」と「市民社会」（NPO、企業、地域組織、地域住民等）である。事業自体が「対象者」として明示しているものではないが、事業を実施することにより、結果として、インクルいわてを含む、地域社会のステークホルダーが間接的に受益していることがわかった。

インクル子ども食堂が「ひとり親とその子ども」と「地域社会のステークホルダー」に「何を提供したか・しているか」「どのような場として機能しているか」を視察・聞き取り・事業報告書を踏まえてリストアップし、考察する。

### **5-1. ひとり親家庭の親と子どもに提供した・提供していること**

インクル子ども食堂は、聞き取り調査で抽出されたポイント（p23の表1）によると、基礎的ニーズへの直接的な対応の場ではなく、エンパワメン

トの場として機能していることがわかった。基礎的ニーズに関しては、それを満たすための社会資源や行政サービスについての情報・知識・アクセスの提供にとどまっている。一方、エンパワメントに関しては、親にとっては自己肯定感と社会の一員としての自信を育む「社会的な繋がり（＝困った時に助けを求められる人間関係・ネットワーク、同じ境遇の人たち、人生や子育てで少し先を行く身近なロールモデルやメンター）」をつくる場として効果的に機能している。

未就学児・小学生にとっては、家族以外の大人や子どもとの交流の場（褒めてもらう、可愛がってもらう、教えてもらう、助けてもらう等）、日常的・非日常的な体験の場（行事、行楽、自然、スポーツ、社会的見聞など）であり、それが自己肯定感を高め、コミュニケーション・対人能力及び学習能力を身につけるエンパワメントの機会となっている。

小学校高学年～高校生にかけての思春期にある子どもたちにとっては、より広い社会（進学先・就職先・アルバイト先など）に出た時に、自分の居場所を見つけ、周囲の多様な人たちとコミュニケーションを取り、困った時には助けを求めるなど、生きていくための土台となる力を身につける場として機能している。また、大学生・専門学校生との関わりや多種多様な職に就く大人たち（福祉職、介護職、行政職、弁護士、看護師、企業関係者等）とのやり取りを通じ、進学や就職など、将来のビジョンを考える場にもなっている。

### **5-2. 地域のステークホルダーに提供した・提供していること**

地域においては、「食」と「場」の提供を通じて、ひとり親家庭と地域のステークホルダーとの繋がりをつくり、その繋がりを土台として、「ひとり親家庭のエンパワメント」と「支え合う地域づくり」を同時に進めるためのプラットフォームとして機能し始めていることがわかる。一方通行の

【表1】ひとり親家庭の親と子どもに提供した・提供していること(間取り調査より)

	基礎的ニーズ(お金、仕事、衣食住、健康、ケア・ニーズ)	エンパワーメント
親	<p>情報・知識(各種社会資源、行政サービス、法律の相談)</p> <p>社会資源へのアクセス(支援への橋渡し)</p> <p>休息・リラクスの時間</p>	<p>社会との繋がり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 同じ境遇の知り合い・仲間(ピア)</li> <li>✓ メンター、身近なロールモデル</li> <li>✓ 困りごとを解決するための相談相手(インクルの相談員、弁護士、福祉等専門家)</li> </ul> <p>主体的な役割(インクルこども食堂へのフィードバック、助言など)</p> <p>→ 自己肯定感、社会的ネットワーク、将来に向けたビジョン、レジリエンス</p>
子ども	未就学児・小学生	<p>家族以外の人たちとの繋がり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 優しい大人</li> <li>✓ 優しくて頼れるお兄さん、お姉さん</li> <li>✓ 学校以外の友だち</li> </ul> <p>生活技術・知識の習得</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 料理・食事の手伝い</li> <li>✓ 大勢での食事</li> <li>✓ 遊びと学習</li> </ul> <p>体験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 季節行事、行楽行事(BBQ等)</li> <li>✓ スキー、スケート</li> <li>✓ 社会見学(工場見学など)</li> </ul> <p>休息・リラクスの時間</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 好きなように振る舞い、行動する時間</li> <li>✓ ニコニコしているお母さん</li> </ul> <p>→ 自己肯定感、帰属感・安心感、楽しい時間・思い出・体験、コミュニケーション・対人能力</p>
	(思春期の子ども) 小学校高学年・中学生・高校生等	<p>制服などの学用品</p> <p>家族以外の人たちとの繋がり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 信頼できる大人</li> <li>✓ 地域の大人・多様な職種の大人</li> <li>✓ 少し年上のお兄さん・お姉さん(大学生等)</li> <li>✓ 似た境遇の同年代の仲間</li> <li>✓ 年下の子どもたち</li> </ul> <p>新たな役割</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 運営の手伝い</li> <li>✓ 子どもたちの相手(遊び、会話、宿題や勉強の手伝い)</li> </ul> <p>→ 将来のビジョン、コミュニケーション・対人能力、社会への信頼感と参画の実感、レジリエンス</p>

---

「支援」ではなく、関わる人・組織すべてが受益しており、関わっている人たちがそれを自覚していることが聞き取り調査からわかった。

各ステークホルダーへの聞き取りから抽出した「インクルこども食堂が提供したこと、していること」は以下のとおりである。

### 5-2-1. インクルいわて

#### a. スタッフ・事務局：

##### ひとり親家庭へのアウトリーチとネットワークの強化

- ・「食事」というコミュニケーションを通じたひとり親家庭との信頼関係とネットワークの構築
- ・ひとり親家庭の実状と支援ニーズの把握
- ・インクルこども食堂という「場」を通してのひとり親家庭との継続的な関わりとモニタリング（エンパワーメントの進捗状況の把握）

##### 「ワンストップセンター」「地域の拠点」としての機能の強化

- ・相談件数、相談内容（データ）、対応実績の蓄積
- ・地域の他分野（介護、福祉等）の支援者・専門家とのネットワークの構築
- ・地域の協力者（企業、個人等）とのネットワークと信頼関係の構築
- ・支援人材の育成（学生、ボランティア）

#### b. ボランティア：

- ・専門家から支援の心構えとノウハウを学び、実地経験を積む機会（福祉等を目指す学生）
- ・それまでの経験（子育て、地域活動等）を活かして地域社会に貢献・参加する機会。社会の問題に当事者意識を持つ機会（地域の人たち）

### 5-2-2. 地域の協力団体

- ・インクルこども食堂の専門職と自分たちの団体の専門職が交流し、学び合う場
- ・インクルこども食堂の利用者と自分たちの団体

（生活困窮者支援団体など）の利用者がオーバーラップしている場合、スタッフの間で利用者の現状やニーズに関する情報共有をしたり、支援策を考えたりする場

- ・地域のステークホルダーの一員として、地域の社会課題の解決に主体的に参加・協力する機会
- ・インクルこども食堂の周知活動・広報活動（含：メディア露出）により、自分たちの団体の認知度も向上

### 5-2-3. 民間企業

- ・社会課題への理解と地域のステークホルダーとしての当事者意識を深める場
- ・企業の社会的責任（CSR）活動の実践と実績づくりの場
- ・将来の消費者・地域人材との繋がりづくり、アピールの場
- ・社員の CSR 意識とチームワークの醸成の場

### 5-2-4. 行政（市・県）

- ・岩手県内・盛岡市内における子ども食堂事業の先駆的事例の提供
- ・課題発見（ニーズ・キャッチ）の専門性と機能を備えた場（「食」を呼び水とするが、専門性を持ったスタッフが、食以外のニーズや困っていることを掘り起こす場、相談に対応する場、支援に繋げる場）
- ・地域レベルでの社会問題の解決と共同体づくりの新しいモデル（例：高齢者の孤食、子どもの貧困・孤食などを同時に解決していくような居場所づくりのあり方・運営の仕方、高齢者が子どもを支援するという一方的な構図ではなく、お互いが支え合う・役に立っているという共同体づくりの試験的取り組み）
- ・行政が最終的にリーチアウトしたい困難層（声を上げられない、自分の困難さを意識化できていない、自分が行政支援の対象だと思っていないな

ど)に辿り着くための経路(インクルに自ら辿り着く力のある当事者と地域の理解者・サポーターの繋がりを創っていくことで、網目を増やし、最も困難な層のお母さんたちをすくい上げていけるようにする)

・「いわての子どもの貧困対策推進計画」(平成27年度策定)の中で呼びかけている取組の「民間による」実践例・先行事例。同計画を市町村に普及啓発する上で、実際の取組のあり方を理解し、参考にしてもらえらる具体事例。

## 6. インクルこども食堂の 付加価値と成功要因

### 6-1. 付加価値

インクルいわての子ども食堂事業は、立ち上げから1年間という短い期間で、付加価値を生み出した。

①「気軽に立ち寄れるワンストップセンター」としての機能:行政窓口や弁護士などの専門家に「わざわざ相談しに行く」程ではないが、少し気になっていること(職場の人間関係や、過去の携帯電話未払い金を督促する葉書など)を雑談のような形で話し、必要に応じて専門家のアドバイスを受けることのできる場となっている。

②「子どもの貧困対策及びひとり親支援に従事する(従事したい・協力したい)人・団体の能力構築(キャパシティ・ビルディング)の拠点」としての機能:インクルこども食堂の企画・運営に携わるスタッフやボランティアに対するブリーフィングを重視し、ひとり親家庭の貧困や困窮の背景にある構造的な問題やスティグマを理解してもらっている。協力を申し出た人たちを単に「人手」「労働力」として捉えるのではなく、地域づくりや問題解決と一緒に担う「地域人材」として位置づけ、教育・啓発に力を入れている。また、インクルこ

ども食堂に関わる地域のステークホルダーにとっては、当事者との繋がり、課題発見(ニーズ・キャッチ)の機会、専門家・実務家同士の情報交換/協働の場として機能している。

③「子ども食堂事業のモデル」の提示:インクルこども食堂は、「子どもの貧困対策」「ひとり親支援」「包摂的な地域づくり」「ワンストップセンター」といった、国や自治体が重点課題・施策としている領域において、「機能的な役割」を果たしている。地域のあらゆる人々・ステークホルダーを結びつけ、それぞれの持っている能力や資源を活用し合う場である。さらに、ひとり親家庭の親と子どもの脆弱性だけに注目し、欠けているものを提供するモデルではなく、親子が持っている潜在能力を引き出し、高め、社会との繋がりを強化していくエンパワーメントに主眼を置いたモデルを新たに提示していると言える。地域と個人(ひとり親家庭の親子)のエンパワーメントを同時進行で行っている、新しいモデルである。

④「ビルドバックベター」の実践事例の提示:2015年3月に仙台で開催された、第三回国連防災世界会議で採択された「仙台防災枠組」は、その根本理念として「ビルドバックベター」(より良い復興=災害前よりもより公正で民主的な社会の構築)という概念を掲げている。そもそも、インクルいわては、震災後の復興過程において、「社会的包摂」(ソーシャル・インクルージョン)の実現を目指して設立された。沿岸部に住む被災した母子世帯や盛岡を含む内陸部に避難・移住してきた母子世帯への寄り添い型・エンパワーメント型の支援を行うと同時に、震災前から存在していたひとり親家庭、特に母子世帯が直面する経済的困窮・社会的孤立という社会構造上の問題を解決に取り組んできた。現在は、インクルこども食堂という新しいプラットフォームを通じて地域ぐるみの支え合いの仕組みを構築している。この取組は、まさに、ビルドバックベターを体現する具体

的事例だと言える。

## 6-2. 成功要因

短期間でこうした付加価値を生み出すことが出来た背景には、いくつかの要因がある。

① **事前調査**：インクルこども食堂の事業企画に先立ち、まずは、スタッフが日本各地の子ども食堂の先行事例を視察し、関係者へのヒアリングを行った。そこで得た知見や情報を踏まえた上で、「子ども食堂事業をインクルいわて全体のミッションにどう位置づけるべきか」、「インクルいわてが発揮できる強みとは何か」を精査・検討する作業を行った。このような入念な事前調査と検討を経て、より明確で具体的な「目的」と「方向性」を持つ事業を実施することができた。

② **柔軟性**：インクルこども食堂の開催後に、参加者、スタッフ、ボランティアからのフィードバックを募り、それらを精査・検討し、その後の運営や内容に反映させるという作業が一連のプロセスの中に組み込まれている。また、参加している親と子どもが意見や要望を言いやすい雰囲気や手法を取り入れることで、「自分たちもインクルこども食堂の企画や運営に主体的に関わっている」という参加意識・役割意識の醸成も同時に図っている。「目的」はぶれないが、「やり方」「内容」に関しては柔軟性を持たせることで、「子ども食堂」が果たしうる可能性・機能を広げ、ダイナミックで発展的な取組となっている。

③ **専門性**：インクルいわては、保育、福祉、法律等の専門領域や社会資源に関して、経験・知見・情報・ネットワークを持ち、現場経験も抱負な実務家・専門家の集まりである。課題の発見、相談、支援先の紹介・同行まで、シームレスな対応を取る「ワンストップセンター」として機能できる団

体である。

④ **パートナーシップ**：インクルこども食堂を地域のステークホルダーの「関わり」「協働」の場にしていきたいという意図を持ち、単に「支援をしてもらう」のではなく、それぞれのステークホルダーにとっても、自身の活動や仕事にフィードバックするような、メリットがあるようなウィン・ウィンの協力関係を構築している。

⑤ **活動資金**：成功要因である「事前調査の実施」「専門家の知見・経験の活用」を可能にしたのは、(特活) JEN が提供した活動資金である。子ども食堂事業が「子どもの貧困」「ひとり親家庭への支援」という目的において成果を出し、その効果を持続させるためには、調査・評価・能力強化(研修等)の費用、専門家・実務家の知見と労働に対する費用が確保されなければならない。予算は食堂開催の実費(食材、会場費等)のみ、それ以外は地域の人たちの善意で成り立たせるような事業では、貧困対策・ひとり親家庭支援の効果や持続性を確保するのは困難である。少なくとも、地域での基盤を作るまでは、十分な投資が必要だと言える。

## 7. 今後に向けた提言

### 7-1. インクルこども食堂の事業内容に関して

① **「体験」プログラムのさらなる拡充**：経済的・時間的な余裕のないひとり親家庭にとっては、子どもに自然体験、社会科見学、スポーツや文化体験の機会を与えることが難しい。一方、子どもにとっては、こうした「体験」の蓄積が、将来の選択肢を広げる上で非常に重要な資源となる。2020年の大学入試改革は、従来の「知識」を問う試験から、「課題発見」「課題解決」能力を重視する試験への移行を目的としており、後者の能力を育む上で必要なのは、多様な生活体験、文化体験、社会体験等の蓄積である。このような「体

験」の機会を提供できない家庭は、進路選択においても不利な状況に置かれることになる。

インクルこども食堂では、「こども食堂×しゃいん食堂」として、企業の協力を得た科学実験のデモンストレーションや工場見学といった体験の機会を既に提供し始めている。市内・県内の企業や団体の協力を得て、こうした「体験プログラム」の拡充を図っていくことが望まれる。

## ②「キャリア教育」の実施：

現在、小学校・中学校・高等学校において、キャリア教育が導入されている。インクルいわての関係者（スタッフ、理事/監事、ボランティア）とインクルこども食堂に協力している地域のステークホルダー（企業、行政、NPO、個人等）は、多種多様な領域でのプロフェSSIONALであり、様々な形で「働いている」人たちである。子どもたちが、身近なところで「多様な職種や働き方」に触れ、話を聞く機会を享受することができれば、社会に存在する多様な選択肢を肌で感じ、将来に向けたビジョン（進学・就職）を描きやすくなる。インクルこども食堂という「場」と、インクルいわてと地域ステークホルダーの「人的資源」を活かして、子どもたちにざっくばらんなキャリア教育を提供することを検討されたい。特に中高生にとっては、進路を考える上でも、学習の動機付けにおいても、貴重な体験となるだろう。

## 7-2. インクルこども食堂の「モデル化」と「普及」～国・自治体によるバックアップの強化～

### ①エンパワーメント型子ども食堂の

#### 実施マニュアルの制作と研修の実施：

インクルこども食堂は、全国的に広がりを見せている子ども食堂の取組の中でもレアケースである。しかし、「子どもの貧困削減」「ひとり親家庭の親と子どものエンパワーメント」「地域の仕組みづくり」を目的とした事業モデルとして、周知・普及する価値のあるモデルである。事業計画の立

て方、ボランティアへのブリーフィング/トレーニングの仕方、地域資源の活用の仕方、パートナーシップの組み方、運営の仕方、広報の仕方などを含めたマニュアルを制作し、そのマニュアルを活用した研修を行うことで、国・地方自治体による「子どもの貧困対策」「ひとり親家庭支援」の施策の質・効果の向上と人材育成に寄与することができるであろう。国・地方自治体の「子どもの貧困対策」もしくは「ひとり親家庭支援」の予算がこうした取組に投じられることを期待する。

### ②思春期の子どもたちへのエンパワーメント支援

の重要性の周知：思春期の子どもたちへの支援ニーズとしては、「学習支援」が注目されがちだが、学校や職場や地域の一員として生きていくための力を身につけ、レジリエンス（困難を乗り越える力）を高めることを目的としたエンパワーメント支援も不可欠である。「教え、教えられる関係」「支援する、支援される関係」ではなく、「多様な人たちと、多様な関係性を結ぶ」経験を積むこと、それがインクルこども食堂のような「継続性のあるコミュニティ・共同体」で行われることが大切である。それが、インクルいわての個別事例（思春期の子どもたちの成長のステップ）が示唆することである。このようなエンパワーメント支援が、子どもの貧困対策において、特に社会に出る一歩手前の中高生の支援ニーズとして認識され、国や地方自治体の政策・事業に明確に位置づけられる必要がある。また、その際にインクルいわての子ども食堂事業等を通じた経験・知見が活用されていくことを期待する。（思春期・若年層の「レジリエンス」（困難を乗り越える力・回復力）に関しては、（特活）オックスファム・ジャパン、（特活）BONDプロジェクト、Gender Action Platform 先行調査『東北 Girls' Voices 東日本大震災・被災地の若年女性調査と提言～震災から4年 忘れられた世代若年女性20人の声を聞く～』を参照されたい。）

平成 29 年 3 月

---

**【ヒアリングへの協力主体】**

インクルいわて、インクルいわてこども食堂の参加者、フキデチョウ文庫(デイサービス施設)、盛岡市役所、岩手県庁

**特定非営利活動法人Gender Action Platform**

「女性と男性が性別による差別を受けることなく、自分の生活や人生における選択肢を自分で選びとり、家庭や社会において尊厳を持って生きることができる環境を創ること」を目的とし、2011年に設立。国際的な知見とネットワークを持つシンクタンク型NGOとして活動を展開している。東日本大震災後は、被災地のジェンダー課題に取り組むNPOの事業評価や調査を通し、政策提言やアドボカシー活動をサポート。2015年に法人化。

[www.genderactionplatform.org](http://www.genderactionplatform.org)

